

2024年5月24日 第3470回例会

於： 横須賀商工会議所



<点鐘・開会> 12:30 藤村 会長

<斉唱> 「それこそロータリー」

<ゲスト紹介> * 関東学院大学国際文化学部比較文化学科 教授 富岡 幸一郎 様
* 青少年交換留学生 Chia-Yuan WEN (Sam) 君

<会長報告> * ガバナー事務所から

・ 青少年交換 第3回ホストクラブ説明会のご案内について

6月1日(土) 14:30~15:20 オリエンテーション第1部

場所：第一相澤ビル8F「会議室」

15:30~17:00 ホストクラブ説明会

場所：第一相澤ビル6F「会議室」

・ 青少年交換派遣候補生・来日学生合同オリエンテーションのお知らせについて

6月1日(土) 14:30~17:00 場所：第一相澤ビル8F「会議室」

【スピーチテーマ】

来日学生：「日本で1番楽しかったこと」(日本語で2分)

派遣候補生：①自己紹介(派遣国の言葉で2分)

②親善大使になるために今努力していること(日本語で2分)

・ 2024-25年度インターアクト委員会・アクターズミーティング開催のご案内について

6月8日(土) 13:00~ IA委員会

14:00~ アクターズミーティング

場所：第一相澤ビル8F「会議室」

* 職場見学会を終えて

* 横須賀LC60周年式典出席について

* 国際大会出席について

* ピンクリボンよこすかチャリティ講演会開催について

<青少年交換留学生スピーチ> Chia-Yuan WEN (Sam) 君

<委員長報告> * 兼城副幹事から次年度向け会員増強セミナー 報告

<幹事報告> * ガバナー月信No. 11

* 週報・横須賀南西RCから受領

* 例会後「ピンクリボンよこすかチャリティ講演会」実行委員会 71開催

<出席報告> * 出席委員会 曾我委員長から5月24日の出席報告

会員数	出席対象者数	出席数(ZOOM出席数)	欠席数	メイクアップ数	出席率
115名	105名	68名(1名)	37名	7名	70.75%

メイクアップ：Enora 会員 Capitol Hill RC出席、小沢会員 国際大会出席

岡田(英)、鈴木(孝) 両会員 三浦RC出席、北村会員 地区委員会出席

小林(一)会員 被選理事役員会出席、濱田会員 理事役員会出席

<ニコニコ報告>

・ 三 役 関東学院大学国際文化学部比較文化学科教授 富岡幸一郎様、楽しみにしておりました。
よろしく お願い致します。

・ 権田、比護、岩崎、石田、長島、福西、植田、南、児玉、
新倉(健)、齋藤(眞)、小佐野、松本(朋)、杉浦、谷、根岸、澤田 各会員

関東学院大学国際文化学部比較文化学科教授 富岡幸一郎様、本日の卓話を心待ちにしておりました。どうぞよろしく願いいたします。

- ・三 役 青少年交換留学生 Chia-Yuan WEN 君ようこそ！残り少ない日本の生活、充実するよう祈念しています。
- ・兼 城、岡田(健)、八 卷、佐久間、小林(隼)、野 坂、
新倉(健)、勝 見、齋藤(眞)、松 岡、澤 田 各会員
青少年交換留学生 Chia-Yuan WEN (Sam) 君ようこそいらっしゃいました。例会をお楽しみください。
- ・大野(健)、木 村、笠 木、竹 株、八 卷、梶 木、
植 田、久保田、上 林、田 邊、山 下、澤 田 各会員
いよいよ明日25日からロータリー国際大会がシンガポールで行われます。藤村会長をはじめとする参加会員の皆様気をつけて行ってらっしゃい！
- ・長尾、小山(健) 両会員 5月25日より初めてのロータリーの国際大会に行ってきます。楽しみにしています。
- ・4番テーブル北村マスター、萩原サブマスター 5月20日、SETTEにて4番テーブルミーティングを行いました。参加して頂いた藤村会長、角井SAA、4番テーブルの皆様ありがとうございました。
- ・大 石、久保田、杉 浦、前 田、角 井 各会員 5月20日金曜日に「セッテ」で4番テーブルミーティングを開催しました。藤村会長、角井SAAにご出席頂き、美味しいイタリア料理を堪能しました。北村テーブルマスター、萩原サブマスター、お疲れ様でした。大変楽しい一時を過ごすことができました。
- ・1番テーブル福西マスター、小山(健) サブマスター 1番テーブルミーティングに会長を始め幹事さん、メンバーの皆様、ご出席有難うございました。近況報告等、様子を知る事が出来まして親睦も深まり楽しいミーティングになりました。小沢一彦会員には、会場、おみやげありがとうございました。
- ・梁 井、Loknath、江 口、鈴木(豊)、徳 永、角 井 各会員 5月21日(火)、甲羅本店にて1番テーブルミーティングが開催されました。藤村会長、角井SAAにもご出席頂き美味しいお料理、徳永会員の卒寿お祝い等の楽しい会話、それにチーズケーキのお土産まで頂き、楽しいひとときを堪能させて頂きました。福西テーブルマスター、小山サブマスター、小沢一彦会員ありがとうございました。
- ・6番テーブル長尾マスター、田中サブマスター 5月22日、第6テーブルミーティングをホテルニューポートヨコスカ1階サルスで開催しました。藤村会長、鈴木幹事にはご参加頂きありがとうございました。また、齋藤眞且会員、石田会員から美味しいワインの差し入れを頂きありがとうございました。
- ・権 田、石 田、齋藤(眞) 各会員 5月22日に6番テーブルのテーブルミーティングを開催いたしました。ご参加いただきました藤村会長、鈴木幹事ありがとうございました。また、ホテルニューポートヨコスカのサルスを会場として貸して頂きました長尾テーブルマスター、シャンパンやワインを差し入れて頂いた齋藤眞且会員、石田会員ありがとうございました。オシャレなひとときでした。
- ・ピンクリボン運動特別委員会椿委員長、加藤(健) 副委員長 いよいよ明後日5月26日ベイサイドポケットにてピンクリボンよこすかチャリティ講演会が開催されます。ご来場頂ける皆様、お手伝い頂ける皆様どうぞ宜しくお願い致します。
- ・齋藤(健)、齋藤(眞)、八 木 各会員 職場見学会では職業奉仕委員会ならびに親睦委員会の皆様には大変にお世話になりました。ありがとうございました。今週末ピンクリボンもよろしくお願ひします。
- ・八 卷、野 坂、越 川 各会員 明日、明後日は下町連合祭礼です。5月26日はYデッキ下から大滝町まで連合渡御でお昼から午後4時まで通行止めになります。よろしくお願ひします。

皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました。富岡でございます。

本日は横須賀ロータリークラブの卓話にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。

実は昨年10月の例会にお招きいただいていたのですが、台風による悪天候で急遽中止になりまして、ようやく今日ここに来ることができました。

関東学院大学で35年ほど教鞭をとっております。高橋副会長が理事長を務める三浦学苑高等学校からは、毎年多くの生徒を送っていただいております。

大学の入学式と卒業式は、パシフィコ横浜という大きな会場で行います。いろいろな来賓が祝辞を述べて下さっておりますが、特に注目を集めるのが本学の卒業生である小泉進次郎代議士のビデオメッセージです。

自民党は今、いろいろと大変なのですが、若い先生に出てきていただいて、何とか日本を良い社会にさせていただきたいと思っております。

さて、今日は政治の話ではなく、文学の話させていただきます。

私は、生まれは東京ですが、鎌倉に移り住んで40年近くになります。67歳になりますので、人生の半分以上は鎌倉にすることになります。

たまたま鎌倉に移り、関東学院というところに就職できましたので、地元である鎌倉のことも進んでやっております。

今日お話しをする鎌倉には多くの文学者・芸術家が集まって来ました。

用意した資料の1枚目に「文学都市鎌倉100人」があります。鎌倉の長谷に、私が2012（平成24）年から10年ほど館長を務めた鎌倉文学館がありますが、大規模改修のため2023（令和5）年4月から2027（令和9）年6月まで休館になっております。

改修に伴う休館により館長職を辞しましたが、館長を務めていた2005（平成17）年に「文学都市鎌倉100人展」を開催しました。鎌倉文学館に入っただけのところに、こういう作家やこういう詩人が鎌倉に住んでいたという地図を掲げました。個人情報漏えいということで、今では到底行うことのできない企画です。

鎌倉にゆかりのある文学者というと、とても100人では済みません。優に250人くらいはおります。

1889（明治22）年に大船から横須賀まで鉄道が通り、鎌倉も保養地・別荘地として非常に人気が高まりましたので、東京から鎌倉に移り住んだ人が多く出てきました。

資料を開けていただくと、トップバッターは夏目漱石です。しかし、漱石は鎌倉には住んでおりませんが、帝国大学英文科を出て松山中学に赴任する前に鎌倉を訪れております。1894（明治27）年の暮れに円覚寺塔頭（たちゅう）の帰源院に参禅して、この経験が『門』の素材となったといわれております。

漱石も大学を出て学校の先生になる前にいろいろと悩みがあったようで、2週間ほど滞在しております。禅寺で座禅を組んで悟りを得たいという思いがあり、仏教界の重鎮であった釈宗演（しゃく そうえん）のところへ行って座禅を組んだのですが、どうもうまくいかない。たった2週間くらいで悟りを得るのは無理だと思うのですが、漱石なりに一生懸命やったわけです。しかし、釈宗演から「お前だめだ！全然だめだ！」と追い返されてしまいました。漱石は悟りを得られず、学校の先生を務め、後に作家として世に出ています。



ですから、漱石にとっても、私たちにとっても、それでよかったですし、この経験が『門』という作品を生みました。素晴らしい表現ですので、『門』の一説を朗読します。

「山門を入ると、左右には大きな杉があつて、高く空を遮っているために、路が急に暗くなった。其陰気な空気に触れた時、宗助は世の中と寺の中との区別を急に覺（さと）った。静かな境内へ入口に立った彼は、始めて風邪（ふうじゃ）を意識する場合に似た一種の悪寒（さむけ）を催した。

彼はまず真直（まっすぐ）に歩き出した。左右にも行手にも、堂の様なものや、院の様なものがちよいちよい見えた。けれども人の出入は一切なかった。悉く寂莫として錆び果てていた。宗助は何処へ行って、宜道（ぎどう）のいる所を教えて貰おうかと考えながら、誰も通らない路の真中に立って四方を見回した。

山の裾を切り開いて、一二丁奥へ上る様に建てた寺だと見えて、後の方は樹の色で高く塞がっていた。路の左右も山続か丘続の地勢に制せられて、決して平ではない様であった。

其小高い所々に、下から石段を畳んで、寺らしい門を高く構えたのが二三軒目に着いた。」

これは非常に見事な文章だと思います。

明治以降、二葉亭四迷や森鷗外が出てきて、新しい言文一致体を作りました。そして、漱石によって現代文がほぼ確立しました。

漱石にとって鎌倉は、青春の悩みと自分を越えた大きな仏の力というものにすがりたいという思いがあった地なのではないかと思います。それが後に『門』という素晴らしい作品になっております。

漱石は「則天去私」、私を去って天に乗るという言葉を残しておりますが、これは彼が晩年理想とした心境で、「我執を捨て、諦観（ていかん）にも似た調和的な世界に身をまかせること」であり、『明暗』はその実践作とされております。そういう思いを漱石はこの鎌倉の地でしたのではないかと思います。

そういう意味では、漱石も鎌倉ゆかりの文士と申し上げていいと思います。

ただ、実際に鎌倉文士を定義しますと、もう少し限定されると思います。私の感じでは、「大正の終わりくらいから昭和の初めに鎌倉に移り住んだ作家たち」を鎌倉文士と呼べるのではないかと思います。

その代表が次に出ております。大佛次郎や川端康成です。そして文芸評論家の小林秀雄、こういった人々が、大正末期から昭和初期にかけて鎌倉に移り住みましましたので、鎌倉文士を定義すると、こういった人々が中心になると思います。

大佛次郎は比較的早く長谷の大仏様の裏に引っ越して、鎌倉女学院の教師なども務めておりましたが、小説家として非常に売れっ子になりました。

大仏様の辺りの地名を大仏と書いて「おさらぎ」というのです。それから取ったペーネームが大佛。次郎は大仏様に対して少し引いて一郎ではまずいので、次郎と謙遜して大佛次郎というペンネームを付けたそうです。そして、その大仏様の裏に長く住まわれました。大佛は横浜ニューグランドホテルにも仕事部屋を持っていた大変な売れっ子でした。そこで仕事をして、ホテル併設のバーでお酒を飲んだりしていた非常にモダンな素晴らしい作家です。

鎌倉雪の下のお宅が「大佛茶亭」として、そのまま残っております。若宮大路を八幡様へ向かい、途中を右に入った路地に大佛次郎の邸宅が今も残っております。

まさに鎌倉文士であり、そして絶筆となった『天皇の世紀』という本当に素晴らしい、小説というよりは幕末維新からの日本の歴史を書いた有根な作品です。朝日新聞に連載していて、癌で亡くなるまで書き続けられました。朝日文庫から出版されております。ぜひお読みいただければと思っております。長いので死ぬまでに読んでください。本当に素晴らしい作品で、日本人というのはこんな感じだったのだという神髓を描いた作品であると思います。幕末維新のいろいろな人が書き残した文章がそのまま使われております。もちろん吉田松陰とか西郷隆盛も出てくるのですが、『天皇の世紀』は、なんと4千人もの人物が出てきます。無名の庶民から歌舞伎役者など、いろいろな人が残した文章を使いながら、大佛は日本がまさに夜明けを迎えるその時代を書いています。途中で亡くなっていますが、もう少し長生きされたら、たぶん戊辰戦争の最後の函館あたりまでお書きになったのではないかと考えております。大佛次郎は大変素晴らしい作家です。

そして、川端康成は、ご存知の通り日本で最初のノーベル文学賞を受賞しています。

川端も文章が素晴らしいので、『山の音』という作品がございますので、その一説をお読みしましょう。

「鎌倉のいわゆる谷（やと）の奥で、波が聞こえる夜もあるから、信吾は海の音かと疑ったが、やはり山の音だった。

遠い風の音に似ているが、地鳴りとでもいう深い底力があつた。自分の頭のなかに聞こえるようでもあるので、信吾は耳鳴りかと思って頭を振ってみた。

音はやんだ。

音がやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそわれた。死期を告知されたのではないかと寒けがした。

風の音か、海の音か、耳鳴りかと、信吾は冷静に考えたつもりだったが、そんな音などしなかったのではないかと思われた。しかし確かに山の音は聞こえていた。

魔が通りかかって山を鳴らして行ったかのようであつた。

急な勾配なのが、水気をふくんだ夜色のために、山の前面は暗い壁のように立って見えた。信吾の家の庭におさまるほどの小山だから、壁と言っても、卵形を半分に分けて立てたように見える。

その横やうしろにも小山があるが、鳴ったのは信吾の家の裏山らしかった。

頂上の木々のあいだから、星がいくつか透けて見えた。」

やはりこれは川端の名文だと思います。

特に、「魔が通りかかって山を鳴らして行ったかのようであつた。」これは書けない。私も鎌倉の山の方に住んでいますので、山の音が聞こえます。「ああ、これが川端の書いた山の音か」と思いました。

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。」有名な『雪国』という小説の冒頭です。これも名文ですが、実は次の一行がすごいです。「夜の底が白くなった。」これは国境のこちら側には雪が降ってない。つまり、長いトンネルを抜けると、雪が降り積もっているわけです。普通の作家ならば「降り積もった雪が、夜の闇の中で白く輝いていた。」となるわけです。しかし、川端は新感覚派といわれていて、若い頃は新しいモダニズムの鋭利な表現を、まるで詩人のような表現をしておりましたので、簡潔に「夜の底が白くなった。」と書いたわけです。つまり、この一行が書ければノーベル文学賞です。

凡人にはこれが書けないのです。「魔が通りかかって」これもそうです。川端はこのように本当に深い表現をするのですが、日本語としてはそれほど難しくはありません。難しくない日本語で非常に深い表現をしております。

『雪国』は、1935（昭和10）年から各雑誌に断続的に断章が書きつがれ、初版単行本刊行時の1937（昭和12）年7月に文芸懇話会賞を受賞しました。その後も戦争を挟んで戦後を書き足し約13年の歳月が傾けられて最終的な完成に至っています。本当に素晴らしい作品です。

川端は大阪の生まれですが、第一高等学校、東京帝国大学国文学科を出て鎌倉に移り住みました。

川端たちがなぜ鎌倉に来たのかには理由があります。「文學界」という雑誌を自分たちで出版しようと1933（昭和8）年に出版するのです。「文學界」は今、文藝春秋から出ておりますが、菊池寛が携わる前の話です。

当初編輯同人の川端康成、小林秀雄、林房雄らに、後に小説家でもあり日本百名山で有名な深田久弥が加わり、鎌倉に集まって「文學界」という同人雑誌が創刊されました。

彼らはプロの作家であるので、今更手弁当で雑誌の発行などする必要はないのです。でもやろうとしました。これはなぜか。時代は1933（昭和8）年です。

つまり、1931（昭和6）年から満州事変が始まり、1937（昭和12）年の支那事変、日中戦争そして1941（昭和16）年の大東亜戦争となるのです。つまり、日本は言論の自由を失っていく最中でした。そういう中で、文士たちが集まって自分たちで雑誌を刊行しようとしたのが鎌倉文士誕生の大きな要素だったと思っております。

林房雄が川端に手紙を出し、「鎌倉の浄明寺にいい貸家がある。すごくいいから、おいで」との誘いに乗り川端もやって来ました。やはり近くにいた方が雑誌は作りやすかったと思われる。編集後記も川端が書いたり、小林が書いたりして、新しい作家たちを発掘していきました。

鎌倉文士の士というのは武士の士なのです。これは私の勝手な解釈ですが、ご存知のように鎌倉は源氏をはじめとする東国武士団が作った新しい都です。京都の公家・貴族の文化とは違い、武士の都が形成されたのが鎌倉です。

『太平記』の中に、自分たち侍の志は、「武士（もののふ）は弓矢の家に生まれてあるものは名こそ惜しめ、命は惜しまぬぞ」とあります。「名誉を大事にする。命は惜しまない」これが東国武士団の一番の思いでした。

ですから、そういう思いが、昭和に物書きたちに自由な言論をさせようとしたのです。だんだんと息苦しくなっていく。戦争に向かっていく。いろいろな検閲が入ってくる。川端の『雪国』もだいぶ検閲されました。その中、自分たちで雑誌を刊行しようというのが、鎌倉文士の気概だったと思っております。

そういう意味では、まさにこの鎌倉という歴史の街が、侍の街が昭和前期の日本が混乱する時代に彼らを集め、そこで一つの表現の本当の自由を求めた集団を作りました。これが鎌倉文士だと私は思っております。

小林秀雄は評論家です。私たち文芸評論家にとっては神様です。私は高校生の頃東京にいたのですが、小林に会いたくて、鎌倉に友達で行った思い出があります。当時は電話帳というものがあり、電話番号や住所が載っていましたから、お住まいは分かっていました。いきなり訪れるのは失礼だと思い電話をしました。

「小林先生にお会いしたい」と告げると、たぶん奥様だったと思いますが、「小林は今、長い仕事をしておりまして、お会いできないのです」と言われ、「はい。分かりました」と電話を切りましたが、家の前まで行きました。家の前まで行ったものの、さすがに呼び鈴はならさずに、押んで帰ってきましたが、当時、小林は『本居宣長』というライフワークを10年かけてお書きになっていたのだらうと思っております。長い仕事というのはそのお話だったのではないかと思います。

写真の小林が首に下げているのは文化勲章です。評論家として文化勲章を受章されました。

鎌倉文士は、このように歴史や文学史に残る人々を輩出しております。しかし、私が敬服するのは、戦争に向かう時代にあって、手弁当で原稿料もない中で、まして自分たちでお金を払い、出版社に頭を下げてまでも書きたいものを書こうという気概です。

1945（昭和20）年5月には若宮大路に貸本屋「鎌倉文庫」を出店します。文士ですから、本をたくさん持っていたのです。原稿料が入らないのですから、貸本でお金を得ようとしたのです。文士たちが持ち寄った貸本を、活字に飢えていた世相を背景に多くの鎌倉市民が集まり、こぞって借りたわけです。敗戦のわずか3か月前の1945（昭和20）年5月ですから、もうすでに大変な時代となっていて、東京は焼け野原です。幸い鎌倉は空襲を免れましたが、当時、川端らは「この貸本屋には、日本で一番自由な空気が流れている。本が自由に本当に楽しんで読める」という集いを彼らは行ったのです。

今、日本は本当に自由なのでしょうか。やはり、いろいろな問題があると思っております。これは政治だけではなく、いろいろな問題があると思っております。先ほど留学生の方がお話されましたが、とってもよかったです。関東学院もいろいろな形でロータリークラブに留学生を含めてお世話になっております。留学生は、遠いところから日本に来て日本語を学び、祖国に帰ろうという非常に強い意志を持っています。

私は、日本の学生たちに「もっと記録を取れ。スマホだけ眺めるな。字を書け。ノートを持ってこい。筆記用具を持ってこい。字は縦に書け。字が汚いぞ」と言います。本当に汚いのです。皆小さい頃からスマホ、パソコンですから手書きが汚いのです。本当に困ったことです。

もっとしっかりと教育しなければいけないと思っておりますが、私もあと数年で定年です。最後に力を振り絞って、大学生に「しっかりやれ」と言い続けたいと思っておりますし、こういう素晴らしい先人が身近なところにいるのだということを授業でも取り上げておりますので、ぜひ横須賀からも多くの生徒を送っていただきたいと思っております。

引き続き関東学院をよろしく願います。

関内駅前に17階建ての新しいキャンパスを造りました。650人収容の「テンネー記念ホール」で、私も昨年4回シンポジウムを行っております。現在、私は金沢八景のメイン・キャンパスにありますが、ご縁がありましたらぜひ遊びに来ていただければと思っております。

本日は貴重な時間をいただきましてありがとうございます。

ご清聴に感謝いたします。

<閉会・点鐘> 13:30 藤村 会長

週報担当 大石 朗